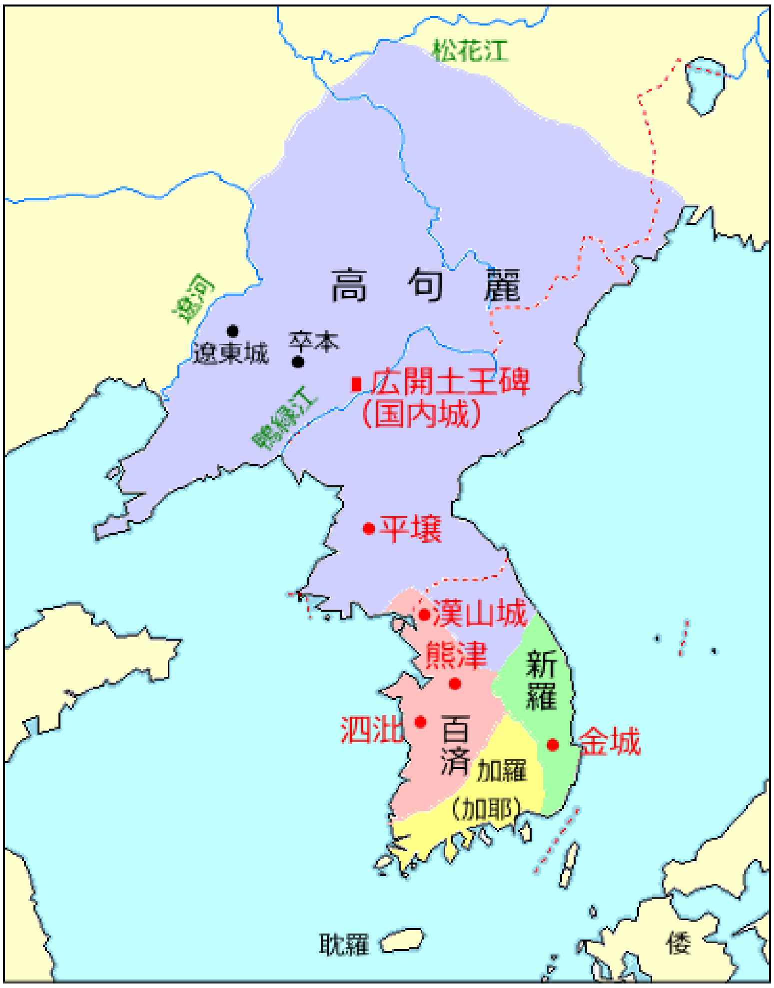
正史を訪れる

Part III 高句麗・百済・新羅の王統

九章　韓条の国々

森隆一



三韓の位置

（世界史の窓より）

はじめに

東夷に関しては倭に関連する記事を取り挙げてきたが、本稿7章で考察した作業仮説候補 7.1 からもう少し情報を得ることが必要と思った。まずは、正史に書かれている主な国の一覧表 4.2 を再掲する。

表 4.2. 正史に現れる東夷と朝貢

	後漢書	三国志	晋書	宋書	南斉書	梁書	魏書	周書	隋書	南史	北史	旧唐書	新唐書	
扶余	○	○	○											3
邑婁	○	○												2
粛慎			○											1
勿吉							○				○			3
裨離			○											1
東沃沮	○	○												2
北沃沮	○													1
靺鞨									○					1
濊	○	○												2
高句驪	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
馬韓	○	○	○											3
辰韓	○	○	○											3
弁辰	○	○	○											3
百済			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11
新羅						○			○	○	○	○	○	6
加羅					○									1
倭	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	11
日本												○	○	2
扶桑						○				○				2
流求									○		○			2
	10	9	8	3	4	5	3	2	6	5	6	5	5	

本章では、正史の韓条の記年記事と前文のうち地勢・国勢・王統に関するものから理解できるものを取り挙げていくつもりである。

韓条のあるのは後漢書・三国志魏書・晋書の３書で、各書は、

韓全体→馬韓→辰韓→弁辰

の順に書かれているが、辰韓と弁辰には混乱の見られる書もある。

この後３つの章で、高句麗・百済・新羅の(朝鮮)三国の王統を扱ったあと、残りの東夷諸国を見ていく。

ここで、古代朝鮮の地図について述べる。Google Map では北朝鮮と韓国の範囲は地名がハングルで書かれている。観光地図では地名が漢字で表記されてはいるものもあるが、全体の地図ではない。ネットで「韓国地図コネスト」が見つかった。(KONEST 韓国地図 https://map.konest.com/)地名がハングルと漢字で書かれているが、大韓民国の範囲をカバーしている。

次の図 9.3 古代朝鮮 は朝鮮から満州南西部にかけての歴史的地名を漢字で表記したもので力作であり、これに替わるものを見いだせていない。

この図は、 http://homepage3.nifty.com/kiya/sehachi/cizu325.html

よりダウン・ロードしたものであるが、このサイトは現在アクセス出来ず、地図の由来に関するデータを得ることができない。

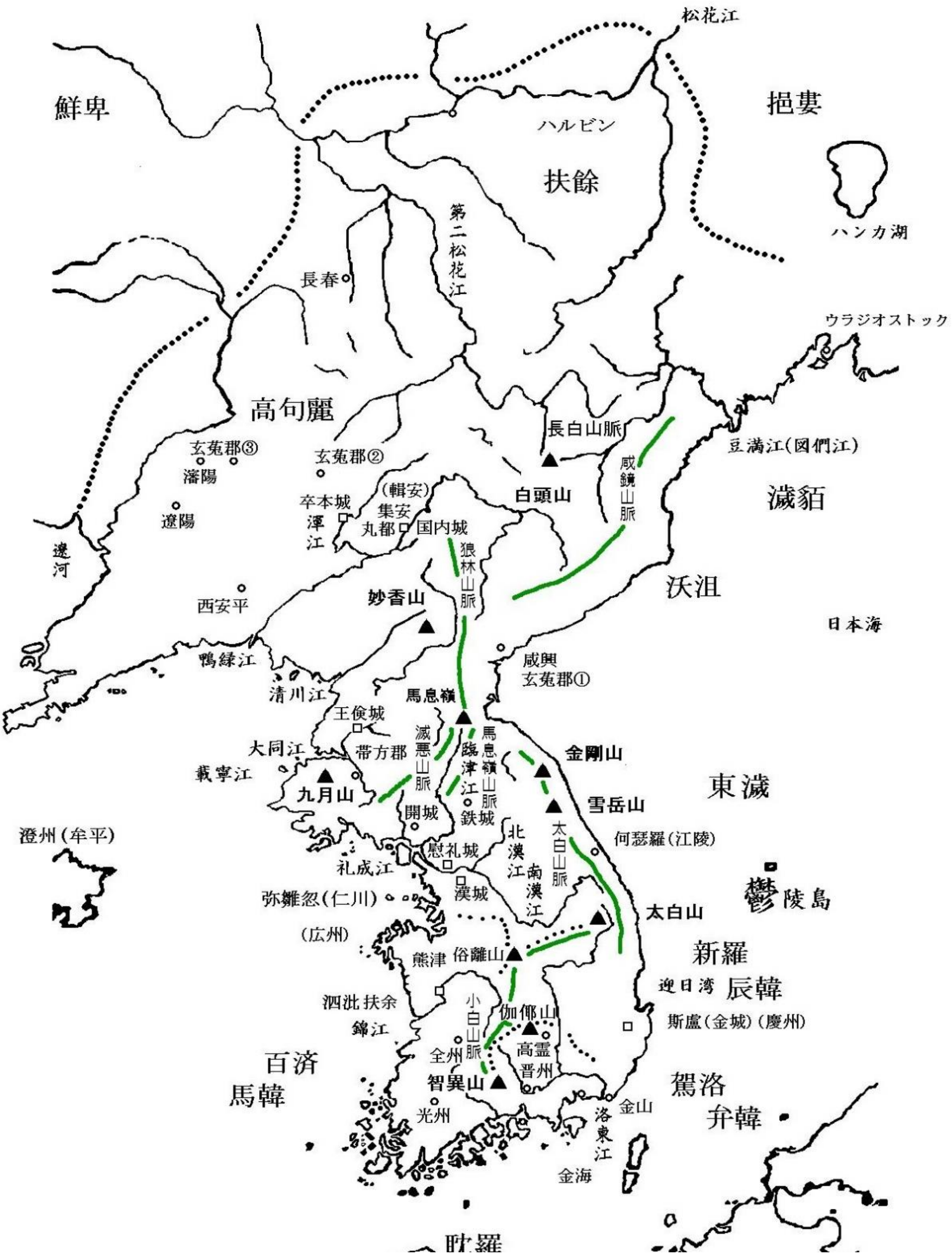

松花江
鮮卑
挹婁
ハルビン
扶餘
ハンカ湖
第二松花江
長春
ウラジオストック
高句麗
長白山脈
豆満江(図們江)
玄菟郡③
瀋陽
玄菟郡②
卒本城
渾江
(輯安)
集安
丸都
国内城
白頭山
咸鏡山脈
濊貊
遼陽
遼河
狼林山脈
沃沮
西安平
妙香山
日本海
鴨緑江
咸興
玄菟郡①
清川江
馬息嶺
王倹城
大同江
帯方郡
滅悪山脈
臨津江
馬息嶺山脈
金剛山
載寧江
九月山
開城
鉄城
雪岳山
東濊
澄州(牟平)
慰礼城
北漢江
南漢江
太白山脈
何瑟羅(江陵)
礼成江
漢城
弥雛忽(仁川)
太白山
鬱陵島
(広州)
熊津
俗離山
新羅
迎日湾
辰韓
泗沘 扶余
錦江
小白山脈
伽倻山
斯盧(金城)(慶州)
全州
高霊
百済
馬韓
晋州
智異山
駕洛
光州
金山
洛東江
弁韓
金海

図 9.1. 古代朝鮮

図 9.3 の全体的な印象としては、東濊・馬韓・辰韓・弁韓を除けばかなり信頼が置けると考えている。東夷伝に現れる国はほぼ書き込まれている。大まかであるが、王険城は現在の平壌で、漢城は現在の京城である。朝鮮と対馬の間の海が金海と書かれているが、この由来は知りたいものである。

百済･新羅の位置は､6 世紀から 7 世紀にかけては正しいと思われるが、4 世紀･5 世紀は、百済は京城辺りあったと考えている。新羅に関しては、5 世以前はわかっていない。

山脈と大きな川は書かれている。ただし、緑の太線で表序されているため、広がりがわからない。長白山脈はこの右上から始まり、鴨緑江の下を左下まで続き遼東半島辺りに至る。現在、この山脈が中国と北朝鮮の国境である。半島部の東は太白山脈により海と遮られて、海沿いの町で咸興を除くほとんどの都市は西海岸にある。

遼東郡の郡衙は西安平の辺りと思われる。漢の軍隊は平原で騎兵の援護を受けた歩兵大部隊の戦闘であり、三国魏までは海運は重要ではなかった。Google の写真地図を見れば、北京辺りから薄いベージュの入った緑の部分を通ってほぼ平壌辺りまで到達できる。

本稿の裏の目標は地図を‵自分で作る色別標高図’に置き換えることである。これまでに施行を兼ねて幾つかの図を作成強いて来た。とくに 3 章はこの意味が強かった。これまでに得られた大まかなことをまとめてみよ

う。

　まずは、地図を高縮尺・中縮尺・低縮尺と分けて見る。目安は数百キロ・数十キロ・数キロである。高縮尺は自分で作る色別標高図のみで、低縮尺は色別標高図と標準地図で、遺跡群や大きな遺跡周辺に充てるのが現時点での選択である。

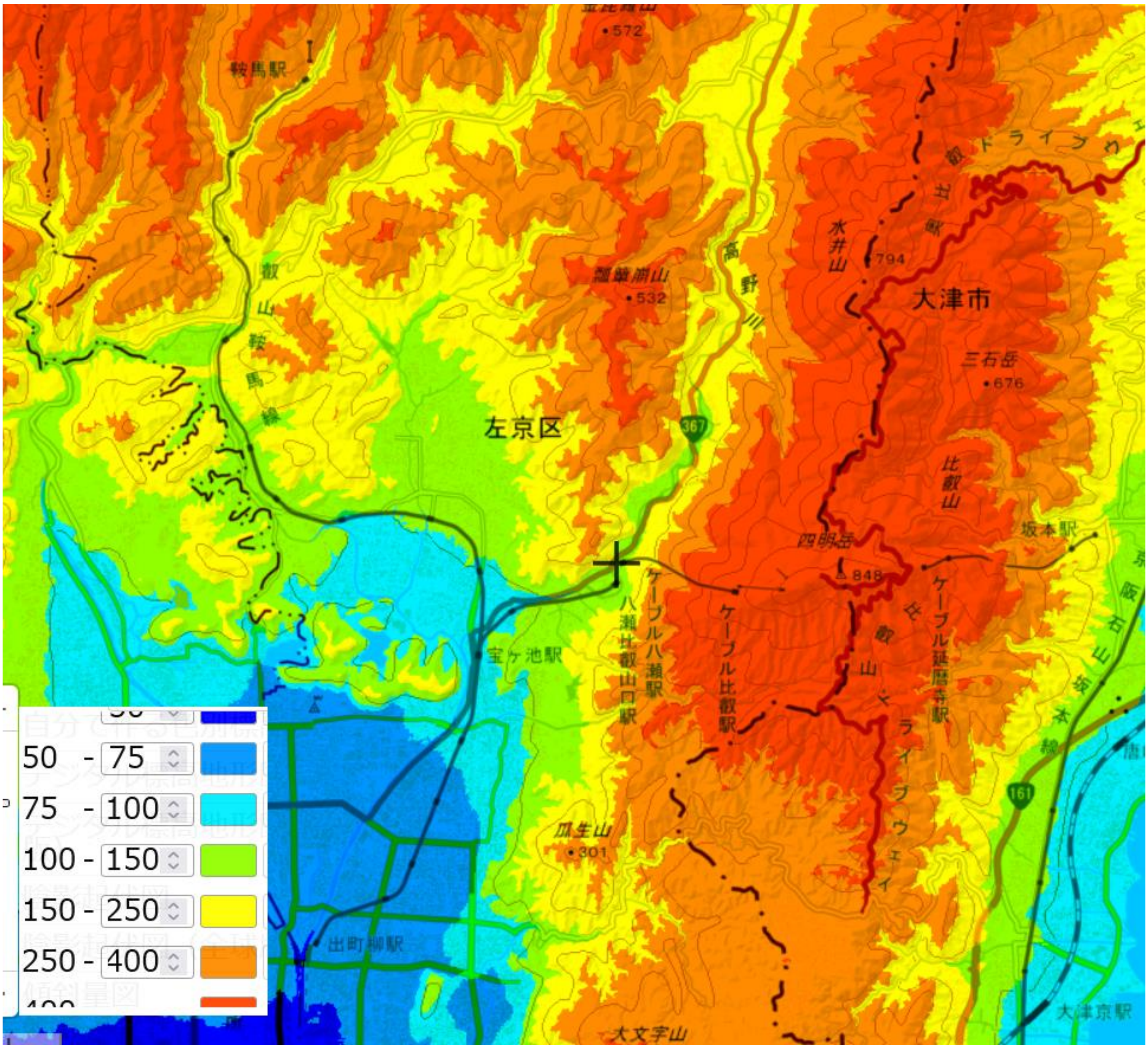


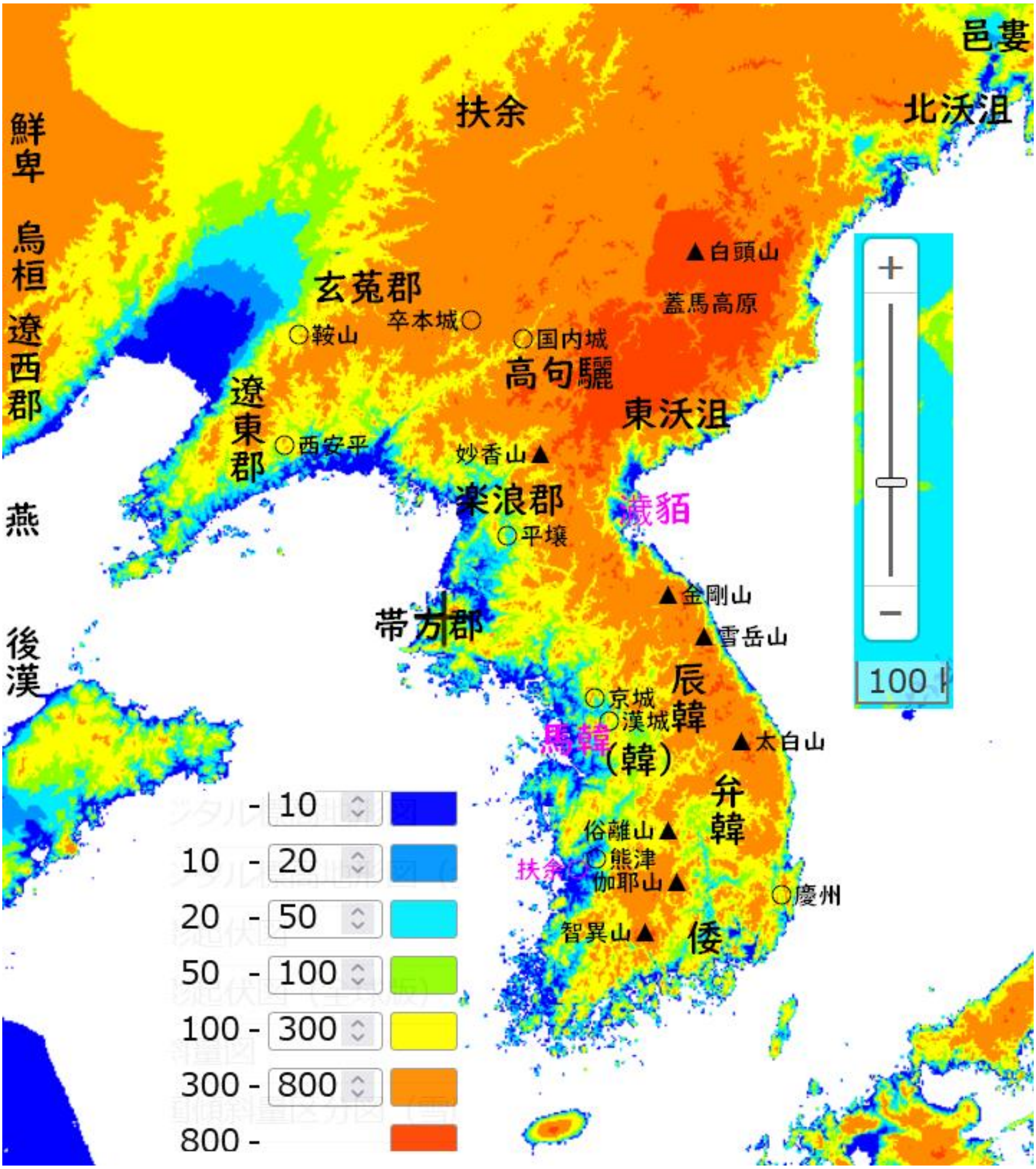
図 9.2. 比叡山

一方、中縮尺では両者を使い分けるのが適当と考えている。この縮尺で多いのは‘○○における××の分布’図と思われるが、これには標高図のみの方が適していると考えている。ただし、作成には時間がかかる。

図 9.4 は色別標高図と標準地図を併せた例として作成したものである。左京区に馴れている人には説明の必要はないであろうが、一応図の説明をする。中央辺りにある ＋ 印には叡山ケーブル八瀬駅がある。この地点から坂本ケーブル坂本駅・大原北部・出町柳駅にはほぼ同じ距離に見える。いどう時間は、大原へは京都バスで 16 分、出町柳へは叡山電鉄 13 分である。一方、叡山ケーブルは 9 分坂本ケーブルは 11 分であるが比叡山頂駅と延暦寺駅の間(直線距離で 1.5Km ほど)の移動時間がこれに加わる。

図 9.4 からは移動手段までは見当がつくが、白地図にではできないだろう。

ここで 2 つの色別標高図を準備した。これらに図 9.3 の地名を書き込むことがまず行うことになる。漢字表記の超古代地図が他にないかと探したら、‘朝鮮地図¥安市城の戦い-640x400.jpg’と‘加耶諸国図.jpg’の 2 つが見つかった



挹婁
扶余
北沃沮
鮮卑
烏桓
遼西郡
▲白頭山
玄菟郡
卒本城〇
蓋馬高原
〇鞍山
〇国内城
高句驪
遼東郡
東沃沮
〇西安平
妙香山▲
楽浪郡
濊貊
燕
〇平壌
▲金剛山
帯方郡
▲雪岳山
後漢
辰韓
〇京城
〇漢城
馬韓
(韓)
▲太白山
弁韓
俗離山▲
〇熊津
扶余
伽耶山▲
〇慶州
智異山▲
倭
- 10
10 - 20
20 - 50
50 - 100
100 - 300
300 - 800
800 -
100

図 9.3. 東夷の地勢

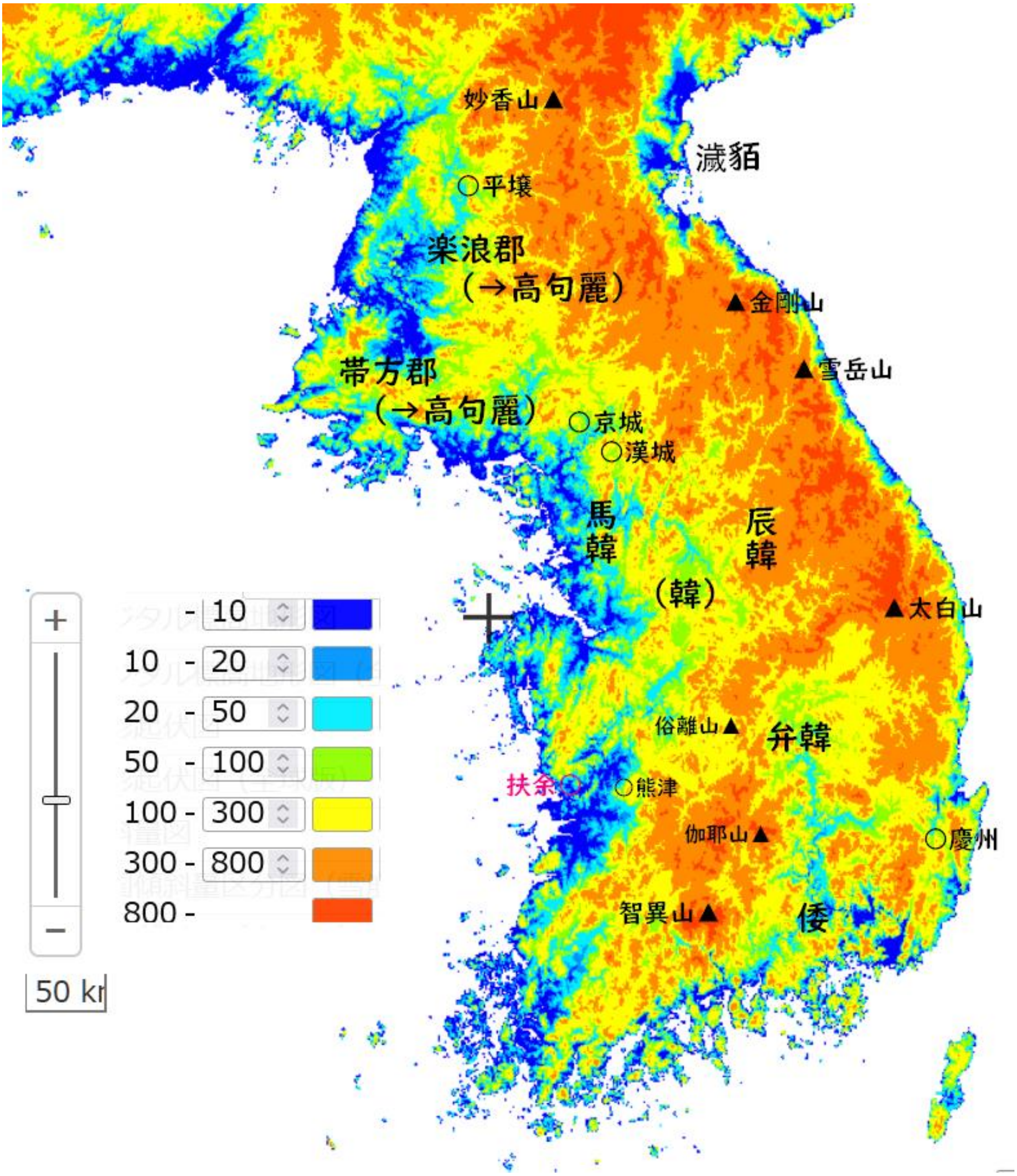

妙香山▲
濊貊
○平壌
楽浪郡
(→高句麗)
▲金剛山
▲雪岳山
帯方郡
(→高句麗)
○京城
○漢城
馬韓
辰韓
(韓)
▲太白山
俗離山▲
弁韓
扶余
○熊津
伽耶山▲
○慶州
智異山▲
倭
- 10
10 - 20
20 - 50
50 - 100
100 - 300
300 - 800
800 -
50 k

図 9.4. 朝鮮の地勢

9.1. 韓条の記事

後漢書の韓条は次の文で始まる。

“韓は 3 つに分かれる。1 つは馬韓、2 つめは辰韓、3 つめは弁辰である。馬韓は韓の西部にあり、54 国を有する。北は楽浪郡と、南は倭と接している。辰韓は東にあり、12 国を有している。北は濊貊と接している。弁辰は辰韓の南に在り、12 国を有し、南は倭と接している。全部で 78 国である。伯濟はこのうちの 1 国である。・・・東西は海で、全ては古の辰国である。”

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 ・・・東西以海為限 皆古之辰國也

伯濟是其一國焉 は百済を念頭においたものであろう。後漢書が成立した 432 年は百済が初めて朝貢した東晋簡文帝咸安二年 372 より後であるが、後漢書の成立時でも百済の出自ははっきりしていなくて、范曄は、伯濟が百済となったと思ったのかもしれない。後漢書の編者には他に情報があったかもしれないが確信のもてるものではなかったと想像している。

ぴんいん　伯：bó、百：bǎi、貊：mò、濊：wèi、倭：wō、我：wǒ

三国志の韓条は次の文で始まる。

“韓は帯方郡の南で、その東西は海であり、南は倭と接し、4000 里四方である。3 種があり、1 つ目は馬韓で 2 つ目は辰韓で、3 つ目は弁韓である。辰韓は古の辰國である。”

韓在帯方之南 東西以海爲限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也

晋書の韓条は次の文で始まる。

“韓は 3 に種があり、1 つ目は馬韓で 2 つ目は辰韓で、3 つ目は弁韓である。辰韓は帯方郡の南にある。東西は海である。”

韓種有三 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帯方南 東西以海爲限

後漢の滅亡は 202 年帯方郡は 204 年から 313 年続いた。

三韓の最後の国の名は、後漢書では弁辰であるが、三国志・晋書では弁韓である。三国志では、弁韓を用いているのはこの部分のみで、他では弁辰を使用している。

後漢書光武帝紀には

“建武二十年 東夷の韓國人が大勢で樂浪郡に詣で内附した。(東夷には辰韓・卞韓・馬韓がある。これらは、いわゆる三韓の国である。)”

東夷韓國人率衆詣樂浪内附(東夷有辰韓 卞韓 馬韓 謂之三韓國也)

とあり、弁のかわりに卞が用いられている。三韓は馬韓・辰韓・弁辰(卞辰)となり、二韓＋弁辰(卞辰)となる。古の辰国から、(馬韓・)辰韓を除

いた所を卞辰(弁辰)としたと考えられる。

謎の国、辰国に関しては、後漢書は韓全体が古の辰国としているが、三国志では辰韓が古の辰国としている。倭と辰国の関係は書かれていない。

ぴんいん　弁：biàn、卞：biàn、辰：chén、秦：qín

続いて、馬韓・辰韓・弁辰の風俗がそれぞれに書かれている。後漢書では弁辰は **弁辰與辰韓雑居** で始まる短いものである。辰王と辰国も書かれているが、これは後で扱う。

この次に記年記事が３つ書かれている。弁辰の後に韓全体と思える記事が書かれているのは、奇異に感じたが、ここまでは、韓の地勢・国勢・風俗を各種別に書いてきて、ここから記年記事が始まる。

“はじめ、朝鮮王の箕準が衛満に破れたとき、将と民衆数千人とともに海に逃れ、馬韓を攻め破り、自ら韓王となった。準の子孫はその後途絶えたため、馬韓の人は復辰王を立てた。”　**初 朝鮮王準為衛満所破 迺將其餘衆數韆人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王 準後滅絶 馬韓人復自立為辰王**（後漢）

この記事が韓の現れる最も古い記事である。漢が成立したのはBC206年で、衛氏朝鮮はBC195?年からBC108年とされていて、武帝により滅ぼされた。攻馬韓ということから、朝鮮は馬韓を含まないと思われる。さらには、

箕準がいたころに馬韓があったかどうかかも怪しい。おそらく、箕準が名のった韓王から、箕準が支配した地域を馬韓と呼んだのではないとかとおもっている。この意意味では、倭の五王の上奏文で用いられている慕韓のほうが適していると思う。

後漢書では(三国志でも)この記事以外に、韓王は書かれていない。さらに、馬韓王・辰韓王・弁韓王も現れない。韓という地方が３つの部分にわけられ、そこに幾つかの国があるという状況である。これに替わって、辰王、あるいは、辰国は時々現れるが、詳細は殆どわからない。かって韓という国があったが、今は三つに分かれているということか。また、この地方は楽浪郡に接している。したがって、小国に分かれている方が漢にとっては望ましいといえる。

後漢書の最初の記年記事は
“建武二十年44 韓人で廉斯の人である蠊/甦/蘇馬諟らが樂浪に詣で貢獻した。光武帝は蠊/甦/蘇馬諟を漢の廉斯邑の君に封じ、楽浪郡に属させた。四季ごとに朝謁している。” **韓人廉斯人蠊/甦/蘇馬諟等詣樂浪貢獻 光武封蠊/甦/蘇馬諟為漢廉斯邑君 使屬樂浪郡 四時朝謁**
である。蠊/甦/蘇 は繁体字への変換で１つに絞りきれず、候補を挙げたものである。最後の蘇をとれば、韓人で廉斯人の蘇馬諟**となる。**

漢廉斯邑君であるが、三国志で挙げられている三韓の諸国に廉斯国はない。外郡の長には王位が与えられるが、内郡の王は太守である。その下の県の朝貢者に与えるのは侯なので、君はその下である。Wiki では郡の下に県あり、県の下は郷・里である。邑は郷と同じかもしれない。また、四時は各季節という意味か。これならば、楽浪郡衙にかなり近い邑ということになる。

最後の記年記事は次である。

“靈帝の終わりの頃、韓と濊は共に盛んになった。楽浪郡とその県は統制ができず、百姓は苦しみ、多数が韓に逃れた。”

靈帝 168-189 末 韓濊並盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者 （後漢）

倭国の大乱は桓霊間であったから、韓濊並盛はその後である。大乱で倭の勢力が衰えたので韓濊が盛んになったと考えられる。

三国志では、桓靈之末で始まるこれと殆ど同じ記事と以下の記事が馬韓の国勢と風俗の間におかれている。

“建安中 196-220 公孫康は屯有縣を分け南の荒地と併せて帯方郡とした。公孫模や張敞らを派遣し、難民を集め、兵とともに韓濊を伐った。舊民がやや出た。その後倭韓は帯方郡に属した。” **公孫康分屯有縣以南**

荒地爲帯方郡 遣公孫模 張敞等收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍出 是後倭韓遂屬帯方

“景初中 237-239 明帝は帯方太守の劉昕と樂浪太守の鮮于嗣を密かに二郡に派遣し、韓の諸国の臣智に邑君の印綬を加賜した。・・・部従事の呉林は、本は楽浪郡が韓国を統治していたことから、 辰韓の八国を楽浪郡に編入した。通訳が異なる内容を伝えたため、臣智は激し、韓は忿し、帯方郡を攻めた。その時の太守弓遵は樂浪の太守劉茂とこれを伐った。遵は戰死したが、二郡は韓を滅ぼした。”

明帝密遣帯方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡 諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戸詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事呉**林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帯方郡崎離營時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓**（三）

これらが韓の記年記事の全てである。

密遣 を ``密かに派遣'' としたが、これでは郡の太守の派遣としてはおかしい。文意からは、密命を与えて派遣したほうがよいが可能かどうかわからない。

建安中の記事から、帯方郡は屯有縣と南の荒地からなるから、韓の地を含んでいない。

あるいは、楽浪郡の南部で、海岸沿いで、現在の北朝鮮の西南部にあったと考えられる。また、文意より郡衙は屯有縣にあったと思われる。海運の

発達により、大きな船が寄港できる港が必要になったことが背景にあると考える。

景初中の記事のうち、楽浪郡に辰韓の８国を組み込むことから、辰韓は楽浪郡に接していて、この地の統治が可能であったはずである。帯方郡とは接していたかもしれないが、交通は楽浪郡よりも不便であったと思われる。現在の地名では、帯方郡の郡衙があったことが可能性のある黄海北道黄州より楽浪郡の郡衙があった平壌のほうが行き易い所になる。あるいは、朝鮮半島の東部は楽浪郡の管轄であったのかもしれない。

晋書では記年記事は馬韓と辰韓+弁辰に書かれている。

韓条の最後に

“馬韓の西の海の島に州鬍国がある。背は短く、髪を剃っている。・・・”

馬韓之西 海島上有州鬍國 其人短小 髡頭 衣韋衣 有上無下 好養牛豕 乗船往來貨市韓中（後漢）

と書かれている。

西海岸の大きな島は江華島である。江華島は京城の西にある。したがって、馬韓は京城辺りにあったことになる。南限は倭との境界になるはずであるが、その位置は現在の大田・扶余の北か南かであると思われるが、わからない。

9.2. 馬韓

後漢書の馬韓の国勢記事は
“馬韓は最大で、馬韓人から辰王を共立する。都は都目支国にある。(三韓の地の王である。其諸國以後の意は、韓の諸国の王は昔は馬韓の人であった。)” **馬韓最大共立其種為辰王 都目支國 儘/盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉**（後漢）で始まる。

馬韓の王については記述がない。また、辰王の記述はあるが、辰国に関しては、韓条の初めに、皆古之辰國也 と書かれているので、後漢書**の時代には存在していないことになる**。この辰と辰王は時々現れる。

これより、目支國(月支國)を都とした辰王は古の辰国の王の末裔と考える。辰国はなく辰王がいるということは、辰国は滅びたが、王家は維持され、王は馬韓の諸国の承認を得て王となっていたのではないかと考える。

この他に 大率皆魁頭露紒介（後漢）があるが、理解できていない。

三国志では馬韓の 54 カ国の国名が全て挙げられている。この 54 カ国は
爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣濆沽國 伯濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國

卑離國 占離卑國 臣釁國 支侵國 狗盧國 卑彌國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧國 内卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 臼斯烏旦國 一離國 不彌國 支半國 狗素國 捷盧國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一難國 狗奚國 不雲國 不斯濆邪國 爰池國 乾馬國 楚離國 凡五十餘國

である。国の比定が出来なければ、凡五十余国で済ましても殆ど変わらないと思われるのに、何故全てを挙げたのか、また、挙げられたのか。帯方郡と接していたため郡の直接の監視下におかれていたことも考えられる。

上の文に続き、

“凡そ50国余りで、大国は1万家余り、小国は数千家併せて10万あまりである。辰王は月支國を治めている。・・・　魏の率善・邑君・歸義侯・中郎將・都尉・伯長のような官吏がいる。”

凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戸 辰王治月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪踧支濆臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長

“(朝鮮)侯准は王を僭称していた。燕の亡命者衛満に攻め奪われ、将と宮廷の人と海に逃れ韓に居住し、韓王と自称した。その後絶滅した。今韓の人で祭祀者として奉る者がいる。漢の時には楽浪郡に属し、季節ごとに朝謁した。”　**侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 其後絶滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁**

が書かれている。

さらに、魏略曰でその経緯が書かれているが、これは理解できていない。Wikipedia「盧綰」から、盧綰が匈奴へ亡命したのは BC195 年である。箕准が衛満に追われ韓の地に逃れたのはこの年よりそんなに離れていない時期であろう。

其後絶滅 とあるから、箕氏の韓は滅びたことになる。後漢書に書かれている王は辰王だけであるので、滅びた時期は後漢成立までとなる。

ここで、桓靈之末 韓濊強盛 の記事が書かれた後

“各邑は一人の主祭天神を立てる。これを天君といっている。・・・”

國邑各立一人主祭天神 名之天君 又諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之 好作賊

が書かれている。

中国の郡県制では、郡→県→邑 である。これに応じて、直轄地以外の国の主に与える称号を王→侯→君としたようだ。

・・・は理解できていないが、駆け込み寺を連想させる内容が書かれている。

晋書四夷傳では、次のように、朝貢が記録されている。

“武帝太康元年 280 二年 281 **その主は立て続けに朝貢した。**”

其主頻遣使入貢方物

“七年 286 八年 287 、十年 289 また頻繁に朝貢した。” **又頻至**

“太熙元年 290 東夷校尉の何龕に詣で、上獻した” **詣東夷校尉何龕上獻**

“咸寧三年 277 また来た。翌年は内附を要請した。” **復來 明年又請内附**

咸寧は太康の前の元号である。元号をとれば、太康元年の前となり、咸寧三年277から太熙元と年290までの14年間に8回朝貢したことになる。凡そ3年に2回の頻度となる。太熙三年としても12年間になり、大差はない。表8.1 東夷〇〇国の朝貢 に咸寧年間の朝貢を除き、東夷〇〇国と辰韓の朝貢と併せたものが示されている。

晋書の時代は19章で扱う予定である。

太康元年の記事について考える。

其主は東夷伝の文からは其王と書かれているところである。後漢や三国魏では(馬)韓王は封じていなかったので、正史では王とは書けなかったことが考えられる。あるいは、王ではなく、盟主的存在であったかもしれない。

次の頻は主(王)の名前も考えられるが、「立て続け(頻繁)」とした。

東夷伝の記事からは、馬韓の主が単独で朝貢したと理解するしかないが、帝紀には馬韓の主の朝貢の記事は無く、東夷〇〇国の朝貢の記事が書かれている。これに関して、3.1節で大雑把な考察をしたが、もう少し考えて

みよう。まず、表 8.1 で、咸寧三年 277 と四年 278 に馬韓の朝貢を加える。

まず目につくことは、馬韓・辰韓の朝貢したときは必ず東夷〇〇国も朝貢している。この表のように頻繁に朝貢するには、高句麗以遠の東夷諸国は不可能であろうと思われ、帯方郡以南の東夷であろう。また、頻度から考えて、帯方郡に出向いたと考える。

8.1 節では、東夷〇〇国は倭の移住後の残存部族であろうと考えた。これから、朝貢の目標が推測できる。かって、卑弥呼の朝貢のとき、難升米が率善中郎将に、牛利が率善校尉に封じられ、銀印青綬が与えられた。このように爵位を得ることが考えられる。さらに紛争の調停もあったかもしれない。

東夷〇〇国と馬韓・辰韓の 3 者が朝貢した年は、太康元年 280、二年 281、七年 286 の 3 つである。これらに意味があるのだろうか。

正史には書かれていないが、源資料には朝貢の記録があったはずで、全ての国の名前が書いてあったと思われる。このリストに三国志の三韓の諸国にはないものが多く、東夷〇〇国は韓の国ではないとされたと考える。

東夷〇〇国の継続的な朝貢は永平元年 291 で終わり、この後は、大元七年 382 に 1 回記録されているのみである。

楽浪郡と帯方郡が高句麗に滅ぼされたのが 313 年で、簡文帝紀に記された百済の朝貢は 372 年であることから、これら東夷諸国は百済に支配され

たか、百済を盟主としたかが考えられる。

馬韓で唯1つ官が書かれていて、辰王が馬韓を支配しているようである。馬韓はほぼ京畿道、辰韓はその 1/4 程度で、江原道あたりではないか。

9.3. 辰韓

後漢書の書き出しは

“古老のいう事には、辰韓は秦の亡人で、苦役を避け韓國に移った。馬韓がその東界の地を割いて与えた。その国名の国を造った。”

辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦

である。

三国志魏書は

“辰韓は馬韓の東にある。秦の役を逃れて韓国に移り、馬韓に与えられたその東の地に住んだ亡人であると伝えられていると古老が伝えている。城柵があり、言葉は馬韓と同じでない。・・・始めは 6 国であったが、その後別れて 12 国となった。”

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之有城柵 其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘: 東方人名我爲阿 謂樂浪人本其殘餘人今有名之爲秦韓者 始有六國 稍分爲十二國

で始まる。最後の始有六國 稍分爲十二國は 9.4 節で扱う。

晋書の書き出しは

“辰韓は馬韓の東にある。秦の亡命者で韓に避難したものに馬韓がその東

の境界の地を与えたと自ら言う。初めは 6 国で後に 12 国になった。弁辰があり、これも 12 国である。合わせて合四五萬戸で、各国は渠帥をもつ。皆辰韓に属する。辰韓の主は常に馬韓人が選ぶ。世世受け継がれているが、自立は出来ない。流移に人で、馬韓が居所を与えた。”

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 馬韓割其東界地與之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓 初有六國 後稍分爲十二 又有弁辰 亦十二國 合四五萬戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故爲馬韓所制也

である。

秦の亡人 は本当だろうか。秦の亡人というと秦朝の関係者をまず思う。また、徐福伝説から、%%図 II05%%の山東省辺りの部族が秦に追われて亡命した可能性は残る。どちらにしても、秦の滅亡以前である。

前節で、衛氏朝鮮が出来たのは漢の初期、盧綰が匈奴へ亡命した BC195 年の頃としたので、秦の滅亡後であり、時期が前後する。可能なものとしては、秦の亡人が箕准に追われ、東に逃れたことが考えられる。

ぴんいん　秦；qín、辰；chén

Wiki「徐福」には

司馬遷の史記の巻百十八淮南衡山列伝によると、秦の始皇帝に、東方の三神山に長生不老(不老不死)の霊薬があると具申し、始皇帝の命を受け、3,000 人の童男童女と

百工を従え、五穀の種を持って、東方に船出し、平原広沢を得て、王となり戻らなかったとの記述がある。

と書かれている。この徐福伝説から、紀元前後の航海技術は、山東半島辺りから朝鮮半島にはリスクはあるものの可能だったといえる。この徐福伝説あるいは蓬莱伝説に現れる蓬莱山の位置は中国の拡大に伴ってその想定地位が東に移動してきたのではないかという疑問を抱いている。

三国志には

“部従事の呉林は、本は楽浪郡が韓国を統治していたことから、 辰韓の八国を楽浪郡に編入した。通訳が異なる内容を伝えたため、臣智は激し、韓は憤り、帯方郡を攻めた。その時の太守弓遵は樂浪の太守劉茂とこれを伐った。遵は戰死したが、二郡は韓を滅ぼした。”

部從事呉林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帯方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

という記事がある。

分割辰韓八國以與樂浪 からは、楽浪郡に 8 国を組み込むことより、辰韓は楽浪郡と接していて、この地の統治が可能であったはずである。帯方郡とは接していたかもしれないが、交通は楽浪郡よりも不便ではなかったと思われる。現在の地名では、帯方郡の郡衙があったことが可能性のある

黄海北道黄州より楽浪郡の郡衙があった平壌のほうが行き易い所になる。あるいは、朝鮮半島の東部は楽浪郡の管轄であったのかもしれない。

辰韓は初めは 6 国で後に 12 国となった。稍分爲十二 とあるから分割して 12 国になったかもしれないが、侵略か開拓かはわからないが、南の地を併せたことも考えられる。

8 国の割譲は当然 12 国になった後であり、8 国は楽浪郡に近い国と考える。さらに、始めの 6 国の多くか全てが 8 国に含まれているのではないかと思う。

辰韓が慶州を都とする新羅になったのが通説と思われるが、上の解釈とはかなり異なる。通説は後の統一新羅のイメージが影響しているのではないか。倭国大乱 の後 韓濊強盛 を考えれば、辰韓が南の地を併合して慶州を都としたとする折衷案も考えられる。

辰韓は馬韓の東で楽浪郡に近い国を含み馬韓の 1/4 程度とすれば、ほぼ現在の江原道の何処かと考える。南朝鮮の北部で江原道辺りではないか。太白山脈の西ならば、春川、原州、忠州、東ならば、東草、東海辺りが候補となる。辰韓が慶州を都とする新羅になったのが通説と思われるが、上の解釈とはかなり異なる。通説は後の統一新羅のイメージが影響しているのではないか。倭国大乱 の後 韓濊強盛 を考えれば、辰韓が南の地を併合して慶州を都としたとすることも考えられる。

風俗の記事を少し拾ってみる。

“秦の言葉に似ている。” **有似秦語 故或名之為秦韓**（後漢）

“ことばは馬韓と同じではない。・・・ 秦人に似ている者がいる、但し燕ではない。斉と同じものがある。楽浪の人を阿殘という。”

其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒 有似秦人非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘（三）

人のうち、燕ではなく斉であるのは徐福伝説を思い起こさせ、徐福の様な方士の子孫説への援護にはなる。

“（訳） **有城柵屋室 諸小別/‌臀邑** 夫々には渠帥がいる。大きいものは臣智、次は儉側、以下樊秖、殺奚、邑藉”

有城柵屋室 諸小別/臀邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊秖 **次有殺奚 次有邑藉**（後漢）

“辰韓では鉄を産している。濊 倭 馬韓は市において、交易し、鉄を貨幣の様に使う。” **國齣鐵** 濊 **倭 馬韓並從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨**（後漢）

鉄貨・鉄銭とは書かれていないので、インゴッドを用いていたと考える。鉄が混乱なく通貨の様に用いられるのは、鉄の生産量がそれほど多くはなかったということを意味しているとは考えられないか。

なんとなく製法はタタラ製鉄と思う。朝鮮半島南部に古代の製鉄遺跡があれば、そこが辰韓の候補となるが、今の韓国の状況からこれらの発掘は

当面は無理だと思われる。考古学的な発掘が出来ることが難しいであろうことと、ここ 30 年程の経済発展で無くなってしまったのではという危惧である。

“武帝太康元年 280 その王が使いを送り朝献した。” **其王遣使獻方物**（晋）

“二年 281 また朝貢してきた。” **復來朝貢**

“七年 286 また来た。” **又來**

これらの朝貢の年には馬韓も朝貢している。また、辰韓と弁辰に対する記事として書かれている。其王 は辰韓の王と考えるのが妥当と思えるが、辰韓の王とは書かれていない。辰王のことか。馬韓では其主としていた。

9.4. 弁辰

三国志(後漢書)では、韓条の始めは弁韓と書いているが、他では弁辰となっている。後漢書は共に弁辰である。晋書には弁辰は書かれていない。8.1 節で卞辰の用例も見た。

後漢書は次の文で始まる。

“弁辰と辰韓は雑居している。城郭と衣服は同じで、言語と風俗は異なる所がある。・・・” **弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美髮 衣服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者** (後漢)

弁辰與辰韓雜居 は、弁辰諸国・辰韓諸国が入り交じっているという意味であろうか。

三国志では、韓条の始めの三韓を挙げている所は弁韓と言っているが、辰韓条はなく、弁辰条となっている。国名を違えて書くということは正史としては異常なことではないかと思える。とにかく、記事中では弁辰を用いているので、なるたけ、弁辰を用いることにする。

“弁辰はまた 12 国である。それぞれは諸小別邑があり、渠帥がある。大は臣智といい、その次は險側、次は樊濊、次は殺奚、次は邑借である。(国名が列挙) 弁韓と辰韓併せて 24 カ国である。”

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚 次有邑借 有已柢國 不斯國 弁辰彌離彌凍國 弁辰接塗國 勤耆國 難彌離彌凍國 弁辰古資彌凍國 弁辰古淳是國 冉奚國 弁辰半路國 弁辰樂奴國 軍彌國 （弁軍彌國） 弁辰彌烏邪馬國 如湛國 弁辰甘路國 戸路國 州鮮國(馬延國） 弁辰狗邪國 弁辰走漕馬國 弁辰安邪國 弁辰瀆盧國 斯盧國 優由國 弁辰韓合二十四國

風俗が書かれた後に、次が書かれ、韓条は終わっている。ここに、 国出鉄 で始まる記事も書かれている。

“弁辰と辰韓は入り混じっている。また城郭がある。衣服は辰韓と同じで、言葉と法俗は似ている。鬼神を祭ることでは差がある。家の入り口は西にある。瀆盧國は倭と接している。12 国には王がいる。人は皆大きく衣服は絜清で、長髪であり、幅の広い細布を造る。法俗は嚴峻である。”

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶皆在戸西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大 衣服絜清 長髪 亦作廣幅細布 法俗特嚴峻

最後の文の 弁辰與辰韓雜居 は後漢書の弁辰項の書き出しと同じである。

24 カ国のリストについて考える。

()付きの国を除けば、弁辰の付かない国は 11 で、弁辰の付く国は 12 である。また、弁辰をとっても同じになる国はない。これより、弁辰の付かない国が辰韓の国で、弁辰の付く国が弁辰の国と思われる。辰韓の国は辰韓の条に、弁辰の国は弁辰の条に分けて書くことが可能なのに、併せて 24 国のリストを挙げ、弁辰を付け辰韓と区別するために書かれていると考えられる。弁辰與辰韓雜居 と関係し、何らかの意味を持つのか、単なる混乱なのか。後者は正史ということからあり得ないとは思う。そうならば、何故一括して書くのかと疑問が尽きない。

とりあえず、弁辰の付く国と付かない国に分けてみる。

付かない　已柢國、不斯國、勤耆國、難彌離彌凍國、軍彌國、如湛國、
戸路國、州鮮國(馬延國)、冉奚國、斯盧國、優由國

付く　弁辰彌離彌凍國、弁辰接塗國、弁辰古資彌凍國、
弁辰古淳是國、弁辰彌烏邪馬國、弁辰半路國、弁辰樂奴國、
（弁軍彌國)、弁辰甘路國、弁辰狗邪國、弁辰走漕馬國、
弁辰安邪國、弁辰瀆盧國

となる。

興味ある国としては、弁辰彌烏邪馬国、弁辰狗邪国、斯盧国(新羅)が挙げられる。たとえば、弁辰狗邪国で、弁辰を韓に置き換えれば、韓狗邪国

となる。韓と狗邪を入れ換えれば、狗邪韓国になる。弁辰彌烏邪馬国は邪馬が含まれていることである。

新羅本紀にある新羅の名前として、斯羅 斯盧 新羅 が挙げられている。

晋書では

“弁辰はまた12国で合わせて4・5万戸である。各国には渠帥がいる。全ては辰韓に属する。辰韓の主は馬韓人が作っている。”

有弁辰 亦十二國 合四五萬戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主

と書かれている。弁辰が辰韓に属することは他の2書には書かれていないことである。雑居の状態から辰韓に属するようになったということかもしれない。

9.5. 辰王・辰国

次の図は、Wiki「辰国」で「朝鮮半島の地図」とされているものである。この図の由来がわかれば面白い。記されていることを前提とすれば、鮮卑と烏桓が書かれているから上限は BC200 年頃で下限は衛氏朝鮮の成立である。Wiki「衛氏朝鮮」ではその成立は 195 年? と書かれている。左下に Han Dynasty と書かれている。漢の成立は BC206 年である。おおよそ BC200 年頃としておく。

図 9.5 箕子朝鮮と辰国

Wiki@edia「辰国」では、

辰国は、衛氏朝鮮の時代(BC2C)に朝鮮半島の南部にあったという国である。記録は少なく、その詳細はほとんどわからない。三国志によると三韓の辰韓の前身にあたる国であると見えるが、実在しなかったという説もある。

正史の記事を、過去の引用と重複するが、挙げていく。

“3種類の韓があり、・・・それらは皆昔の辰国である。・・・馬韓が最大で、韓の中より辰王を共立する。都は目支國である。”

韓有三種・・・皆古之辰国也・・・馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國（後漢）

“辰韓は昔の辰国である。・・・辰王は月支國を治めている。”

辰韓者古之辰国也・・・辰王治月支國（三）

“辰韓の十二国は辰王に属する。辰王は馬韓人の中から選び継がれている。辰王は自ら王となることは出来ない。”

其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王(三)

古之辰国には、2通りの解釈が可能である。1つは辰国の末裔で、もう1つは辰国のあったところである。どちらでも議論に影響はほとんどない。

古とは何時のことか。後漢書・三国志の箕準の記事から、箕準が韓の地に移る前で、が攻めたのは辰国とも考えられる。辰国は滅ぼされずに辰王

が目支國に居住したが、辰王となるには馬韓(箕準の子孫)の承認が必要であったとすれば上の後漢書の記事とも整合がつく。

%% 「微子啓」　　　微：wēi、濊：wèi、箕：jī

9.6. 韓と三韓の王

東夷が書かれている列伝では、国王が書かれている国と 無大君王 あるいは 無大君長 など国王がいないと書かれている国がある。ここでの王は、正史の言葉を用いれば、夷蛮の主である。この種の王は少なく、殆どの王は三国魏により親魏倭王の爵位を受けた倭(女)王卑弥呼や、後漢の光武帝により王号を復号された高句麗王のように、中国の王朝により叙位された王である。これは、中国王朝の正史ということから当然のことである。

ここでは、朝鮮王と韓王、および、各韓王について、引用してきた記事を見直してみる。

まず、韓王についてみていく。後漢書からは「朝鮮王の箕準が衛満に破れたとき、海に逃れ、馬韓を攻め、自ら韓王となった。」三国志では「侯准は王を僭称していた。」と書かれていた。

三国志の記事からは、漢王朝は箕準を朝鮮侯は認めていたが、朝鮮王は認めていなかったことになる。僭称としていることは、箕準が朝鮮を支配していたことは認めたことになるのではないか。BC200 年頃に朝鮮がどの程度中国に認識されていたかが問題となる。

現状では、これ以外には韓王の記述を見つけていない。

後漢書東夷伝の前文で「燕人の衛満は朝鮮に避難し、その国の王となった。100 年あまりの後、武帝がこれを滅ぼした。」と書かれていた。この後、漢の武帝により、衛氏朝鮮の地には楽浪郡が、その南には真番郡がおかれたので、正史には朝鮮王・韓王は登場しないことになる。この地に王が現れるのは、楽浪郡と帯方郡が滅びた後の宋の時代の百済王である。

馬韓についても馬韓王は書かれていない。かわりに、「馬韓人から辰王を共立した」と書かれている。辰国と辰王については前節で考察した。このとき、辰国と辰韓の扱いが曖昧のように感じた。

後漢以降は 300 年頃までは、朝鮮半島で中国王朝が認めた王は、倭王のみであり、倭の移住後はなくなったことになる。

三国志では韓の 78 国の国名を挙げている。この数からして、県の下の邑レヴェルの名前まで帯方郡は把握していたことになる。また、「各邑には、魏の率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長のような役人がいる」と書かれているのは、楽浪郡・帯方郡の制度を模したものではないかと考える。

これらから、帯方郡には入っていないが、同じレヴェルで直接のコントロールを受けていたのではないかと考える。この状況は楽浪郡・帯方郡にとっては、大きな勢力が出来るのを抑制しており、都合の良いものであったはずである。

おわりに

後漢書の記事 **伯濟是其一國焉** に関して記事の整理が少し進んだのでこれを述べることに居する。ただし、この記事に関しては II 章で行うことにして、ここでは予備的考察に留める。

晋書までの正史の東夷を扱う巻には韓条のみで、百済条はない。

一方、簡文帝記に、

“簡文帝咸安二年 372 正月 百濟と林邑の王は夫々朝貢した。”

正月遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

“六月 使いを送り、百濟王の餘句を鎮東將軍領樂浪太守に叙した。

遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

という記事が本紀に見られる。

この記事を、百済の位置がわからなかったため帝紀においたと漠然と思っていたが少し違うように思える。それは、百濟王は夷蛮の王で郡太守は漢帝国内の官職であり、正史の構成からは、太守の任免は帝紀に書くのが筋であろう。また、范曄は百済について知っていたのではないか。しかし、恐らく、江南の王朝に属する范曄には百済に関する記録を得られなかったので、**伯濟是其一國焉** と書き込んだと思っている。

また、**鎮東將軍領樂浪太守** から百済が楽浪郡の地を支配していたことが必要である。高句麗本記と百済本記に次の記事が見つかった。

三国史記高句麗本記第16代 故国原王331-371

“四十一年371十月 百濟王は兵三萬を率いて、平壌城を攻めてきた。王はこれに対し出師したが、流矢にあたり、”

百濟王率兵三萬 來攻平壤城 王出師拒之 爲流矢所中

“この月の二十三日に薨かった。” **是月二十三日 薨**

三国史記百済本記第13代 近肖古王346-375

“二十六年371 高句麗軍が攻めてきた。王はこれを聞き、兵を於?河に伏せ、撃退した。この年、王と太子は精兵三萬を率い、高句麗を侵し、平壌城を攻めた。高句麗王斯由は迎え撃ってが、流矢に当り死んだ。王は軍をひき、漢山に都を移した。”

高句麗擧兵來 王聞之 伏兵於浿河上 俟其至急擊之 高句麗兵敗北 冬 王與太子帥精兵三萬 侵高句麗 攻平壤城 麗王斯由力戰拒之 中流矢死 王引軍退 移都漢山

“二十七年372正月 晋に使いを派遣し朝貢した。” **遣使入晉朝貢**

三国史記の記事からは、高句麗を撃退し楽浪郡の地を東晋の冊封を受けたことになる。

朝貢の使者に対しては、国状にいついての聞き取りが行われ、記録されたはずである。晋書に百済条が無いのは、聞き取りの内容が記録に値しなかったのか、記録が失われたことが考えられる。

関連すると思われる記事を挙げておく。

東夷〇〇国 の朝貢 265-291，382

313 年に帯方郡が滅亡

317 年に西晋が滅ぼされ 318 年に東晋が建てられた

北部は五胡十六国時代を経て北魏に始まる北朝に

北魏 385-535(西魏・東魏)・北斉 550-579・北周 556-581

420 年東晋は滅亡し、南朝の時代となる

南宋 420-479・南斉 479-502・梁 502-557・陳 557-589

432 年頃に范曄により後漢書が編纂された

648 年房玄齢・李延寿らによって晋書が成した

%%%第 19 代 廣開土王　391-412

%%%(2022/01/24) 三国遺事巻第二に、

駕洛國記（文廟朝。大康年間。金官知州事文人所撰也。今略而載之）

巻第一では、高句麗・卞韓・百済・辰韓　　第五まで掲載(2025)

付録　正史の韓条

後漢書

韓有三種：一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 大者萬餘戸 小者數韆傢 各在山海間 地部/閤方四韆餘浬/裏/裡 東西以海為限 皆古之辰國也 馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 儘/盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉

馬韓人知田蠶 作綿佈 齣大慄如梨 有長尾雞/鷄 尾長五呎 邑落雜居 亦無城郭 作土室 形如冢 開戶在上 不知跪拜 無長幼男女之別/彆 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重瓔珠 以綴衣為飾 及縣頸垂耳 大率皆魁頭露纟介 佈袍草履 其人壯勇 少年有築室作力者 輒以繩貫脊皮 縋以大木 歡呼為健 常以五月田竟祭鬼神 晝夜酒會 群聚歌舞 舞輒數十人相隨 蹋地為節 十月農功畢 亦復/複如之 諸國邑各以一人主祭天神 號為“天君” 又立嚒/甦/蘇塗 建大木以縣鈴鼓 事鬼神 其南界近倭 亦有文身者

辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦語 故或名之為秦韓 有城柵屋室 諸小別/彆邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊秖 次有殺奚 次有邑藉 土地肥美 宜五穀 知蠶桑 作縑佈 乘駕牛馬 嫁娶以禮 行者讓路 國齣鐵 濊、倭、馬韓並/併從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨 俗喜歌舞、飲酒、鼓瑟 兒生欲令其頭扁 皆押之以石

弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美發/髮 衣服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者

初 朝鮮王準為衛滿/滿所破 迺將其餘眾/衆數韆人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王 準後滅絕 馬韓人復/複自立為辰王 建武二十年 韓人廉斯人嘛/甦/蘇馬諟等 詣樂浪貢獻 光武封嘛/甦/蘇馬諟為漢廉斯邑君 使屬樂浪郡 四時朝謁 靈帝末 韓、濊並/併盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者

馬韓之西 海島上有州胡國 其人短小 髡頭 衣韋衣 有上無下 好養牛豕 乘船往來 貨市韓中

三国志

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也 馬韓在西 其民土著 種植 知蠶桑 作綿布 各有長帥 大者自名爲臣智 其次爲邑借 散在山海間 無城郭 有爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣濆沽國 伯 濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國 卑離國 占離卑國 臣釁國 支侵國 狗盧國 卑彌 國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧國 內卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 臼斯烏旦國 一離國 不彌國 支半國 狗素國 捷盧 國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一難國 狗奚國 不雲國 不斯濆邪國 爰池國 乾馬國 楚離 國 凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪踧支濆臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長

侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 魏略曰：昔箕子之後朝鮮侯 見周衰 燕自尊 爲王 欲東略地 朝鮮侯亦自稱爲王 欲興兵逆擊燕以尊周室 其大夫禮諫之 乃止 使禮西說燕 燕止之 不攻 後子孫稍驕虐 燕乃遣將秦開攻其西方 取地二 千餘里 至滿番汗爲界 朝鮮遂弱 及秦並天下 使蒙恬築長城 到遼東 時朝鮮王否立 畏秦襲之 略服屬秦 不肯朝會 否死 其子准立 二十餘年而陳 項 起 天下亂 燕 齊 趙民愁苦 稍稍亡往准 准乃置之於西方 及漢以盧綰爲燕王 朝鮮與燕界於浿水 及綰反 入匈奴 燕人衛滿亡命 爲胡服 東度浿水 詣 准降 說准求居西界 （故）中國亡命爲朝鮮籓屏

准信寵之 拜爲博士 賜以圭 封之百里 令守西邊 滿誘亡黨 衆稍多 乃詐遣人告准 言漢兵十道至 求入 宿衛 遂還攻准 准與滿戰 不敵也 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 〈魏略曰：其子及親留在國者 因冒姓韓氏 准王海中 不與朝鮮相往來 〉其後絕滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁 魏 略曰：初 右渠未破時朝鮮相曆谿卿以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戶 亦與朝鮮貢蕃不相往來 至王莽地皇時 廉斯鑡爲辰韓右渠帥 聞樂浪土 地美 人民饒樂 亡欲來降 出其邑落 見田中驅雀男子一人 其語非韓人 問之 男子曰：「我等漢人 名戶來 我等輩千五百人伐材木 爲韓所擊得 皆斷發爲 奴 積三年矣 」鑡曰：「我當降漢樂浪 汝欲去不？」戶來曰：「可 」（辰）鑡因將戶來（來）出詣含資縣 縣言郡 郡即以鑡爲譯從芩中乘大船入辰韓 逆 取戶來 降伴輩尚得千人 其五百人已死 鑡時曉謂辰韓：「汝還五百人 若不者 樂浪當遣萬兵乘船來擊汝 」辰韓曰：「五百人已死 我當出贖直耳 」乃出辰 韓萬五千人 弁韓布萬五千匹 鑡收取直還 郡表鑡功義 賜冠幘 田宅子孫數世 至安帝延光四年時 故受復除

桓 靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國 建安中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模 張敞等收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍 出 是後倭韓遂屬帶方 景初中 明帝密遣帶方太守劉昕 樂浪太守鮮于嗣越海定二郡 諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戶詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

其俗少綱紀 國邑雖有主帥 邑落雜居 不能善相制禦 無跪拜之禮 居處作草屋土室 形如塚 其戶在上 擧家共在中 無長幼男女之別 其葬有槨無 棺 不知乘牛馬 牛馬盡於送死 以瓔珠爲財寶 或以綴衣爲飾 或以縣頸垂耳 不以金銀錦繡爲珍 其人性強勇 魁頭露紒 如炅兵 衣布袍 足履革蹻蹋 其國 中有所爲及官家使築城郭 諸年少勇健者 皆鑿脊皮 以大繩貫之 又以丈許木鍤之 通日嚾呼作力 不以爲痛 既以勸作 且以爲健 常以五月下種訖 祭鬼神 群聚歌舞 飮酒晝夜無休 其舞 數十人俱起相隨 踏地低昂 手足相應 節奏有似鐸舞 十月農功畢 亦復如之 信鬼神 國邑各立一人主祭天神 名之天君 又 諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中皆不還之 好作賊 其立蘇塗之義 有似浮屠 而所行善惡有異 其北方近郡諸國差曉禮俗 其遠處直如囚徒奴婢相聚 無他珍寶 禽獸草木略與中國同 出大栗 大如梨 又出細尾雞 其尾皆長五尺餘 其男子時時有文身 又有州胡在馬韓之西海中大 島上 其人差短小 言語不與韓同 皆髡頭如鮮卑 但衣韋 好養牛及豬 其衣有上無下 略如裸勢 乘船往來 市買韓中

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之 有城柵 其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘；東方人名我爲阿 謂樂浪人本其殘餘人 今有名之爲秦韓者 始有六國 稍分爲十二國

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚 次有邑借 有已柢國 不斯國 弁辰彌離彌凍國 弁辰接塗國 勤耆國 難彌離彌凍國 弁辰古資彌凍國 弁辰古淳是國 冉奚國 弁辰半路國 弁樂奴國 軍彌國〈弁軍彌

國〉 弁辰彌烏邪馬國 如湛國 弁辰甘路國 戶路國 州鮮國（馬延國） 弁辰狗邪國 弁辰走漕馬國 弁辰安邪國〈馬延國〉 弁辰瀆盧國 斯盧國 優由國 弁 辰韓合二十四國 大國四五千家 小國六七百家 總四五萬戶 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王 〈魏略曰：明其爲流移之人 故爲馬韓所制 〉土地肥美 宜種五穀及稻 曉蠶桑 作縑布 乘駕牛馬 嫁娶禮俗 男女有別 以大鳥羽送死 其意欲使死者飛揚 魏略曰：其國作屋 橫累木爲之 有似牢獄也 國出鐵 韓 濊 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡 俗喜歌舞飲酒 有瑟 其形似筑 彈之亦有音曲 兒生 便以石厭其頭 欲其褊 今辰韓人皆褊頭 男女近倭 亦文身 便步戰 兵仗與馬韓同 其俗 行者相逢 皆住讓路

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶皆在戶西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大 衣服絜清 長髮 亦作廣幅細布 法俗特嚴峻

晉書

馬韓 辰韓 弁韓

韓種有三：一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帶方南 東西以海爲限

馬韓居山海之間 無城郭 凡有小國五十六所 大者萬戶 小者數千家 各有渠帥 俗少綱紀 無跪拜之禮 居處作土室 形如塚 其戶向上 舉家共在 其中 無長幼男女之別 不知乘牛馬 畜者但以送葬 俗不重金銀錦罽 而貴瓔珠 用以綴衣或飾發垂耳 其男子科頭露紒 衣布袍 履草蹻 性勇悍 國中有所調 役 及起築城隍 年少勇健者皆鑿其背皮 貫以大繩 以杖搖繩 終日歡呼力作 不以爲痛 善用弓楯矛櫓 雖有鬥爭攻戰 而貴相屈服 俗信鬼神 常以五月耕種 畢 群聚歌舞以祭神；至十月農事畢 亦如之 國邑各立一人主祭天神 謂爲天君 又置別邑 名曰蘇塗 立大木 懸鈴鼓 其蘇塗之義 有似西域浮屠也 而所行 善惡有異

武帝太康元年 二年 其主頻遣使入貢方物 七年 八年 十年 又頻至 太熙元年 詣東夷校尉何龕上獻 咸寧三年復來 明年又請內附

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 韓割東界以居之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓 初有六國 後稍分爲十二 又有弁辰 亦十二 國 合四五萬戶 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故爲

馬韓所制也 地宜五穀 俗饒蠶桑 善作縑布 服 牛乘馬 其風俗可類馬韓 兵器亦與之同 初生子 便以石押其頭使扁 喜舞 善彈瑟 瑟形似築

武帝太康元年 其王遣使獻方物 二年復來朝貢 七年又來